

国際教育研究センター 外国語教育研究会

外国語教育に携わる研究者が担当授業等で実践している教育活動の成果を発表し、教育内容及び指導方法を高め合うことを目的とする研究会である。英語教育や日本語教育といった、言語分野の異なる研究者が集い、研究領域の近年の動向や注目するトピックの情報交換を行っていく。様々な視点で語学教育を捉えて、これまでの教育活動の足固めを行うこと、また、新たなステージでの研究活動につながる知見を共有することを本研究会の主たる目標とする。

第1回 2022年12月18日開催

第1部 英語教育

13時～13時20分「BNClabの活用法について」

田畑 圭介 神戸親和女子大学 教育学部児童教育学科

Lancaster 大学ホームページからアクセスできるBNClab (<http://corpora.lancs.ac.uk/bnclab/search>) を使った語学教育について考察する。本サイトでは、1994年と2014年に完成した、イギリス英語の話し言葉コーパスを比較調査することができ、性別、年齢、社会階層、地域といった項目で年代間の差異を図式化する機能が備わっている。BNClab を用いた際、どのような語法現象の例示が適切か、いくつかのパターンを示し検討を行う。

13時20分～13時40分「洋楽が教える異文化とその解釈について」

山縣 節子 フリーランス

英語圏の楽曲の中に文化的風習や慣習を題材としているものがあります。本発表では、異文化理解を目的として英語圏の音楽を活用する手法を検

討します。文化背景の相違から歌詞の解釈が異なる可能性を指摘し、楽曲が伝えようとするメッセージを的確に受け取るための注意点を論じます。クリスマスをテーマにした楽曲を用い、それぞれの作品が本来持つ文化的な様相を楽しむ手法についても合わせて考察します。

第2部 日本語教育

13時40分～14時00分 「対話を目指す発音指導の教室実践 ―型の活用―」

折本 早木子 神戸親和女子大学 非常勤講師

教室活動における第二言語学習においては、ともすれば評価・測定の容易な文法知識や語彙の習得、読解項目に重点が置かれがちで、他者との実際のコミュニケーション能力の育成という側面が見落とされがちである。本発表は「型」を使用することによって、場面に応じた適切な日本語使用の定着を図り、自らが論理的に話し他者の話を肯定的に聞く能力を習得するための教室実践と、「対話」のための基本的スキルの習得について考察する。

14時00分～14時20分 「日中同形語についての研究 ―「単調」・“単調”を例として―」

花 蕾 関西大学大学院 外国語教育研究科

日本語と中国語は古来漢字文化圏と言われ、ともに漢字を使用しており、そのため日本語と中国語において同形語が多く生まれた。同形語は、同じ漢字を使用する第二言語学習者にとって、習得しやすいことは言うまでもない。しかし、多くの先行研究によって、学習者が母語と近似する意味を取る同形語を使用する際に、誤用を起こすこと

が明らかにされている。その原因は同形語の品詞やコロケーションなどの用法が異なるためである。本発表では国語辞典と日中中日辞典など利用し、コーパスを用いて、日中同形語の「単調」・“単調”を例として、コロケーションを考察する。そして、共起語ネットワーク上の違いを分析する。

第2回 2023年2月27日開催

第1部 日本語教育

13時～13時20分「日本語教師の専門性と役割についての一考察 —CEFR (CV) を参照して—」

折本 早木子 神戸親和女子大学 非常勤講師

近年「登録日本語教員（国家資格）」創設に向けての動きが報道されるなど、日本語教育、ひいてはその「教育実践を行う者」としての日本語教師の在り方が注目されている。従来の日本語教師は、フィールドごとのスキルが問われ、「○○ができる」といったCanDo的な形で捉えられることが多かった。しかし、フィールドの複雑化や同時に複数のフィールドに関わらざるを得ない現状を考えた時、教師自身が「単なるスキルの積み上げ」ではない明確な教育理念（日本語教育観）を持つと同時に、教育実践について内省的実践家（reflective practitioner）であることが求められ、かつ複言語、複文化についての自分なりの理解と取り組みが必要であると考えられる。また、教育実践の場においては、自身の持つ教育観が他者と必ずしも見解を一にするとはいえない。そのような現状を踏まえた上で、今後、日本語教師が教育実践者として、また日本語教育の専門家としてどのように他者と関わり、成長していくことができるか、その方向性について考察する。

13時20分～13時40分「中国人修了生の語り
にみる留学生活における問題事例」

三井 絢子 神戸親和女子大学 非常勤講師

来日する留学生の増加に伴い、それぞれの持つ背景や留学目的も多様化してきた。生まれ育った、または慣れ親しんだ文化圏を離れ、異文化の中で

生活する留学生は、あらゆる不安や困難に直面する。これらの問題は、留学生が持つ背景や留学目的によって異なり、留学生活においてさまざまな形で現れる。その一つの事例として、日本の大学で学部と修士課程を修了して帰国した中国人修了生に、自身の留学生活全体を振り返ってもらった。多くの留学生に関わってきた日本語教師の立場から、その語りを考察した結果、日本語力と経済的な問題を中心に他の問題も絡み合い、留学生活に影響していることがわかった。

第2部 英語教育

13時40分～14時00分「『英語文学作品研究』
でChimamanda Ngozi Adichieを読む」

藤田 眞弓 神戸親和女子大学 文学部国際文化学科

本学で開講されている「英語文学作品研究A・B」でナイジェリアの女性作家Chimamanda Ngozi Adichieの短篇小説を通年で精読することによる学修効果を従来（2021年度まで）の授業運営と比較して報告する。本科目の到達目標を確認した上で、2022年度に読んだ作品と学生の反応を毎時間の授業コメント、レポート、授業評価アンケートの結果等に基づいて報告を行う。登場人物、物語共に日本の女子大学生には想像もつかない世界の物語にも関わらず、学生は物語とその背景を理解し、登場人物に深い理解と共感を示すことが出来ている。本科目は適切な授業運営計画のもと、作品や作家の選定を工夫すれば確実に学生は英語力と異文化理解の力をつけることができる科目であると述べ、本発表の結びとする。

14時00分～14時20分「英語倒置現象の指導方法について」

山縣 節子 フリーランス

映画作品はさまざまなジャンルで構成され、それぞれのセリフ群には創意、工夫が込められている。本発表では英語の倒置現象が登場する作品を紹介し、大学の授業での活用法について考察する。倒置現象は書き言葉の表現として捉えられる傾向

にあるが、映像作品の中では一定数の使用が散見される。実際の使用例を示しながら、倒置現象の存在とその機能に触れ、大学の授業での効果的な指導方法について検討を行う。

14時20分～14時40分 「児童文学における
ジョークの英語教育への活用」

宇野 光範 神戸親和女子大学 教育学部児童
教育学科

英語児童文学のミドルグレード／ヤングアダルト小説に登場するジョークを英語教育に活用する方法について、授業での実践事例をもとに検討する。児童文学作品を「生教材」の一つとして利用するという視点から、素材として Louis Sachar 作の *Someday Angeline* を扱った。作品内のジョークは、それ自体の面白さに加えて、物語そのものを紡いでいく機能も担っている。本発表では、物語の重要な局面に登場する3つのジョークを取り上げ、それぞれについて文脈を重要視した上で、① Vocabulary Building、② 創作としての翻訳、③ 文芸鑑賞、という3つの観点から検討する。児童文学におけるジョークが、学生の言語理解や創造性を涵養する切り口の一つになり得ることが見えてきた。